

「自虐史観」

2014年06月30日

沖縄県の石垣市は2011年8月、八重山列島の竹島町、与那国町の3市町でつくる教科書採択地区協議会を主導し、中学公民教科書に育鵬社版を選んだ。選定理由は中国との領土問題で揺れている尖閣諸島に関し「領土問題がしっかり扱われている」と認定したからである。一方、竹島町は「沖縄の米軍基地問題の記述が少ない」として育鵬社版を拒絶、東京書籍版を採択し、協議会を離脱した。竹島町は国から同一教科書を採択するように厳しく求められたが、最終的には竹島町の言い分が通った。公民に関して、3市町で分裂したが、歴史は「沖縄戦の取り扱いが充実している」として帝国書院版を一致して採択した。

育鵬社版は、従来の教科書を「自虐史観」と攻撃してきた保守系の識者らで構成する「新しい歴史教科書をつくる会」のメンバーなどが執筆した教科書である。自虐史観とは「従軍慰安婦」、「南京虐殺」、沖縄での「集団自決（強制集団死）」などに関して、日本の恥部になることを書き立て、それらを子どもたちに教えることは国民の誇りを失わせると見なす歴史観である。「従軍慰安婦」は軍の関与があったのか。「南京虐殺」で虐殺されたのは何万人だったのか。沖縄での「集団自決」は軍の命令であったのか。議論は百出している。これらの議論の中で「育鵬社版」は、戦争は著しく非人間化するものであることを、多くの証で明らかにされているにもかかわらず、戦争を正当化、美化しようとしている。またいたずらな「愛国心」を駆り立てようとしている。そこでは新たな戦争を生み出す契機を作り出す。

事実でないことを書き、教えることは間違っていると、誰もが認める。しかし、これらの事実をなかったかのように歪曲し、あるいは、過少に評価して正当化することは、きれいで、勢いがよさそうに見えても、欺瞞によって心の芯が萎えてくる。そして、被害を受けた人々との和解の道が閉ざされる。被害を与えた事実を正確に認識し謝罪することは勇気のいることである。しかし、それは決して「自虐」ではなく、真に人間になり、共生の喜びを見出すことになる。歴史の事実を直視することは誠実さと良心に関わる。その誠実さと良心が明日を切り拓き「自虐」や「歪曲」を超えていく。ちなみに、横浜市は「育鵬社版」の教科書を使用している。

集団的自衛権の議論は憲法を解釈によって変更しようとするものである。憲法の条文の「武器の不保持、戦争放棄」の言葉を残したまま、他国との戦争を認めよと言っている。言葉はこうですと書いているが、それはどうでもいい、こうしますと言っている訳である。言葉の意味を無くしていることを子どもたちに教えらるであろうか。

事実を捻じ曲げ「自虐史観」であると非難する、また、言葉が無意味とする集団的自衛権の議論は、人の心を限りなく「虚無」に陥れ、文化を腐敗させていく。どんなに辛くても、事実を認め、言葉の真実を守る。そこに、心が立つ、魂がよみがえる喜びがあり、共に生きる希望が生み出されていくのではないか。

キリスト教は「言葉の宗教」である。言葉には命があり、その言葉が事実となっていくと信じる。また、キリスト教は「罪の悔い改め」を説く宗教である。罪を悔い改めることによって、赦しが得られる。そこに、和解があると信じる宗教である。